

The Journal of True Care

2012
秋号
Autumn
[Vol.15]



株式会社創心會® 機関誌
2012年秋号 Vol.15

「もっとできるをもっと知ろう」

- ・特集 『顧客満足度を高めるために』 ……02
- ・コラム 『ど根性ファーム
～半年を振り返って～』 ……08
- ・現場レポート ……10
- ・認知症ケアプロジェクト ……13
- ・感動体験 『心のバトン』 ……14
- ・創心會大祭り芸能部門 ……16

The Journal of True Care

2012
秋号
Autumn

[Vol.15]

» INDEX

P02-07	<p>特集 『顧客満足度を高めるために』</p> <p>創心会訪問看護ステーション 作業療法士 小山 隆幸</p> <p>創心会居宅介護支援センター倉敷 介護支援専門員 萩野 由紀子</p> <p>リハビリ倶楽部築港 管理者 社会福祉主事 妹尾 祥平</p>
P08-09	<p>コラム</p> <p>合同会社ど根性ファーム 川原 雅規</p>
P10-12	<p>現場レポート</p> <p>リハビリ倶楽部茶屋町 社会福祉主事 菅森 美希</p> <p>リハビリ倶楽部吉備 健康運動実践指導者 仲本 幸平</p>
P13	<p>認知症ケアプロジェクト</p> <p>認知症部会リーダー 創心会訪問看護ステーション</p> <p>本物ケア推進部 作業療法士 吉中 京子</p>
P14-15	<p>感動体験 『心のバトン』</p> <p>創心会ヘルパーステーション岡山 介護福祉士 武田 淑佳</p> <p>参謀本部 人事部 諏訪 真樹</p>
P16-17	<p>創心會大祭り芸能部門</p> <p>大祭り実行委員 副委員長 佐藤 健志</p>
P18	<p>ニュース 編集後記</p>

特集

「顧客満足度を高めるために」



症例検討 創心流リハケア の視点 Point5

生活行為・動作能力の向上

創心会訪問看護ステーション

作業療法士 小山隆幸



はじめに

創心流リハケアの視点では、Point5に生活行為・動作能力の向上がある。ご利用者様が動作のコツを覚えることや動作を繰り返す練習が必要だといわれている。近年、ニューロリハビリの発展により脳機能の効果も検証しながら、現場で活かせる訓練方法が検証されてきている。その一つが、運動イメージ法を用いた訓練である。今回は、動作の繰り返し練習が必要な方に運動イメージ法を用いて介入し、成果がみられたので報告する。

運動イメージ法とは

まず運動イメージ法について簡単に解説する。運動イメージとは、スポーツ選手が行うイメージトレーニングが一番思い浮かびやすいだろう。創心流リハケア講座の中でも、運動イメージ法の効果が紹介されている。パスカルレオナの研究から、身体的訓練3日分と運動イメージ法5日分が同等の訓練効果が得られたと報告されている。

運動イメージ法は一人称と三人称に分類される。一人称運動イメージ=筋感覚的運動イメージと呼ばれている。これは、あたかも自分自身が運動を行っている状態をイメージすることである。三人称運動イメージ=視覚的運動イメージと呼ばれている。これは、他者が運動を行っている状態をイメージすることである。

なお、運動イメージ法を導入する際、脳損傷の場合は部位や範囲によってイメージすることが困難となる可能性がある。介入する前に、イメージする能力があるかを評価することも必要になる。

症例紹介

年齢：60歳代 性別：女性

疾患：脳出血(右橋)

コミュニケーション：軽度の構音障害をみとめるが聞き取りにくいことはない。

<要介護度>要介護4

<家族構成>夫と二人暮らし。主介護者は夫。

<家屋状況>家屋は2階建の一軒家。

<サービスの利用状況>訪問のリハビリを週2回、デイサービスを週3回、月に1週間程度のショートステイを利用されている。

評価

<身体機能>

主な症状として両上下肢、体幹に運動失調をみとめる。感覚障害の表在感覚は軽度鈍麻で手指にしびれをみとめ、深部感覚は中等度鈍麻である。物をつかむことやつまむことは可能。視覚機能は、複視があり、物が二重に見えるため矯正眼鏡を使用している。右上下肢に比べ左上下肢の方が強く失調をみとめ、企図振戦や測定異常をみとめる。ベッド端座位では両手をベッドについた状態であれば保持可能だが、動きが伴うと座位保持は困難となる。

<認知機能>

高次脳機能障害として、軽度の全般性の注意障害があり、動作時に注意散漫さをみとめる。

<ADL>

日常生活動作はほとんどの動作において一部介助～介助を要している。移動は車いす自走(両下肢で操作)で屋内見守りで可能。時々、ブレーキをかけ忘れたまま移乗動作を開始する場面をみとめる。

<目標>

夫の介助下で移乗動作をスムーズに安定して行いたい。

● 介入

リハビリ内容：ベッドへの移乗動作に対して介入(ダイレクトアプローチ)

使用道具：iPad

イメージ方法：ベッドと車いす間の移乗動作を2回実施する。1回目の動作は口頭指示を行わず普段通り動作を行っていただいた。この時の動作をiPadの動画機能を利用して動作を録画した。動作終了後に、動画で移乗動作をOTRと一緒に観察した。観察の際、動作ごとの筋感覚をイメージして想起しやすいように促した。具体的な指示内容は「立ち上がりの際おじぎをして、足の幅を広げて、太ももに力を入れて下さい。」である。

効果判定：時間測定、運動項目チェックリスト

● 介入効果

1. 時間測定

イメージ前後の動作時間は表1のとおりである。時間測定は、ベッドから車いすへの移乗時の立ち上がり開始から着座までの時間を測定した。結果より、イメージ後の方が動作時間を要した。

表1 イメージ前後の時間測定

	イメージ前	イメージ後
時間(秒)	35	41

2. イメージ前後の動作変化

イメージ前後の動作変化を運動項目チェックリストとして表2にまとめた。チェックリストの内容は、OTRが普段の動作観察・分析から独自に作成した。安全に行えている項目は○とした。結果より、イメージ後の方が動作を安全に行えている評価を得た。

表2 運動項目チェックリスト

ベッド⇄車いす	イメージ前	イメージ後
車いすからの立ち上がりは安全に行えているか	○	○
方向転換は安全に行えているか		○
安全に着席出来ているか		○
安全に手すりを使用している	○	○

● 考察

今回の結果より、ベッドへの移乗動作のダイレクトアプローチを行う中で、運動イメージ法による介入により

動作の質が向上したことが考えられる。

動作時間の延長に関しては、iPadの動画によるフィードバックにより、慎重に動作を遂行しようとした可能性が高い。動作の安定性向上に関しては、動作の慣れによる運動学習の要素が大きいことが考えられる。運動学習の視点から、運動イメージは期待される運動感覚を顕在化させる効果を有しているといわれている。また、運動を学習するためには、予測と結果の照合が重要だといわれている。つまり、無意識で行っている予測を意識下にあげることが重要になると考えられる。これにより、身体の変化に気付くきっかけとなるだろう。

脳機能の視点から、脳解剖学では橋は小脳と神経路が結びついている。つまり、小脳の損傷による主症状としてみとめられる運動失調が出現しやすい。また、小脳の損傷により、計算能力や記憶等の認知機能が低下することが報告されている。小脳は、視床を介して、運動野、運動前野と結びつきがあり、運動前野は、行為のイメージに関連する部位ともいわれている。以上より、本症例の場合は橋出血であり、行為イメージをしにくい状態であった可能性も考えられる。

今回の介入は、一つの動作の数回の介入にしかすぎない。今後の課題として、症例数を増やして効果の検討や他の動作での介入効果の検討が挙げられる。

● おわりに

訪問のリハビリでは、日常生活動作の動作パターンを定着させるために動作を繰り返し練習する機会がある。動作を定着させるためにコツをつかむことがポイントになる。今回はiPadを使用した。リハビリのツールを工夫して使用することで動作向上につながる経験が出来た。今後もアプローチ方法について改善すべき点はあると思うが、ご利用者様の将来の生活イメージをしながら意味のあるアプローチを提供していきたい。

貴重な経験をさせていただいたご利用者様と、ご協力いただいたスタッフの皆さんに感謝を申し上げます。



私たちはもっと活かせる！ もっと出来る！ 見る立場が変わって気づいたこと

創心会居宅介護支援センター倉敷

介護支専門員 荻野 由紀子



はじめに

私は創心會に入社する前は、特別養護老人ホームの介護職員として2年、老人保健施設でリハ助手として3年勤務していた。創心會に入社を決めたのは、長年あこがれ続けていたデイサービスで今までのキャリアを活かせること、そして、ご利用者様を第一に思う社風が素晴らしいかったこと。この二つの理由から、平成16年4月創心會に入社した。まずは週3日、パートとして茶屋町のデイサービスに配属となり、平成17年4月に築港デイサービスに異動。その後、平成19年には正社員となり、新規デイサービスの立ち上げにも関わらせていただきながら、平成24年2月までの8年間デイサービス一筋に頑張ってきた。

縁あってこの3月から居宅部門に異動となり、不安、楽しみ半々な想いを持って研修がスタート。自社デイサービスしか知らない私の為に、上長の配慮で、今後連携をとっていく他部門を知ることからスタートさせていただいた。その研修で、私は大きな衝撃をうけた。それは、今まで自分の中で当たり前と思っていたことが、実は当たり前ではなかったという事実。その一つとして、ご利用者様の表情が、デイサービスと自宅では全く違っており、性格も別人ではないかと思えたほどの場面に出会ったことだ。デイサービスでは、どちらかといえばスタッフ側が優位に物事を動かすことが出来るが、自宅ではご利用者様や家族が優位となる。しかも、長年培われた習慣もあり、ご利用者様はなかなか今までの環境や、生活リズムを変えようとはしていただけない。訪問系のスタッフはこういった相手のフィールドに入りながら、ご利用者様の自宅環境、家族の状況を五感で感じとり、会話で直接確認をとりながら、可能性の引出ポイントを模索されていた。研修の中で私は、自宅において、ご利用者様をその気にさせることの難しさを目の当たりにし、自分は8年も在籍しておきながら、「生活」の場での本当のご利用者様の姿を知らずに過ごしてきたことを知る事となった。もちろん今までも、訪問系のサービス内容は知識として知ってはいたが、それはあくまで情報レベル。このようにご利用者様一人ひとりに合わせた、水面下での細かいアプローチ方法が存在している事は知らなかった。私の知っていたご利用者様像が、実は限られた一面のみであったこと、そして私の知っていた創心會の

サービスが情報だけであり、その結果を生み出すための過程やアプローチについてはまだまだだったことに気付かされた。在籍年数が多いだけで全てを知っていると勘違いしていた事を、恥ずかしく思った。自分の中の知識と、現実のギャップの大きさを実感していたとき、上長より「その違いに気付けるのは、デイサービスから異動してきた荻野さんならではの視点。その視点が居宅部門や、他部門の良い刺激になるはずなので、その感覚を大事にしてほしい」と言ってくださった。そしてそれを機に、違いの感度の高くなっている今だからこそ気付けること、それを意識して周囲に発信していくことが自分の使命と思い、今回筆を執らせていただいた。

3つの提案

ここからは、ケアマネジャーとデイサービス、双方から見た情報の質の違いについて、感じたままを考察してみる。ケアマネジャーという仕事は、家族や本人、サービス事業所などから得た情報を基にして、総合的に状況を判断しなくてはならないことが多い。いうなれば、情報量が支援の質を左右するといっても過言ではないだろう。それ故に、情報が氾濫してくるため、どこが重要な情報であるのか、という優先順位を考える必要が出てくる。その時起こるのが、自身の経験をベースにした優先順位の判断、つまり「情報の取捨選択」だ。介護士は介護士として、看護師は看護師としての優先順位があり、これは職種だけでなく、職業経験を通じても変わってくるものでもあるだろう。

私が実感したのは、リハビリ倶楽部の経験を通して、私自身の捉える優先順位、重要事項が一般的なケアマネジメントの判断において、必ずしも有効に用いられていないということだ。そこには、現場を踏むことで理解できるデータの有用性がある。デイサービス出身のケアマネジャーとして私が思うのは、その情報が持つ有用性の違いであった。

データの取捨選択について、どのような情報を支援に活用するのか。あるいは、どのような情報をサービスに流すのか。こうした取捨選択の責任を、ケアマネジャーは負う。そうした情報の流れを追うと、デイサービスにいた時には“知らなかった”、あるいは“知っていたらもっと役立てることができた”情報も多く存在していた。つまりは、その情報を共有することによって、「もっとデイサービスでもできることがあったのに」とケアマネジャーになってから感じるということがあったということだ。デイサービスは、情報発信の役割を負うことが多い。一例をあげれば、「デイサービス利用中はこのような様子でした」「体力測定の結果こうでした」というような形だ。

デイサービスでは限られた環境で、それを全てと思っ

て自己完結してしまうという事が起きやすい。ここで視点を広く持ち、生活全体の中でデイサービスの果たす役割を意識できれば、自ずと情報の持つ意味、活かす意味も変わってゆくだろうと感じる。

ケアマネジャーの側も、デイサービスで行っている小さな取り組みが持つ意味、背景、目的まで学ぶことでマシンや体操で行う機能訓練だけでなく、デイサービスで過ごすすべての時間がリハビリテーションになっていることを理解でき、自社リハビリ倶楽部の強みをさらに引き出すことができるだろう。つまり、自社ならではの自慢のサービスをもっと知ってほしい。そのうえで、“もっと活用してほしい”と節に願う。

ではどうすれば、ご利用者様にとって有益な情報を共有し、活用することができるのであろうか。私は「3つの提案」を皆様に提起したい。

提案その1 アンテナを磨いて、情報を活かそう! (自己認識と感受性の強化)

誰しも自分の見たいような見方で情報を捉えている。固定された価値観でものごとを見ていると、どうしても偏ったり情報が歪んでしまうことがある。こうしたことを防ぐためにも、まずは自らが「アンテナを磨く」という意識を持って、業務に臨むことが必要だろう。常にアンテナを最新版に更新していこうという自覚と、「何の為のサービスか」を意識できれば、情報の「質」は高まっていくはずである。

提案その2 もっと相手のことを知ろう、そして期待しよう! (チームの意識統一)

立場の違いというのは、あらゆる場面に於いていえることでもある。しかし、それを言い訳にしていたのでは真の意味での連携は進まない。少なくとも、それが利用者へ還元されるサービスの質に直結することであるという意識を持てば、「もっと相手のことを知ろう」と考えるのは自然なことである。

だからこそ、ケアマネジャーの皆さんには、デイサービスの人達の立場や思いをもっと知って欲しいし、デイサービスの皆さんには、ケアマネジャーの人達の立場や思いをもっと知って欲しい。それはリハビリ倶楽部から居宅に異動した私であるからこそ、「言わなくてはならない」と感じる部分でもある。そして、相手のことをお互いに信用して、期待を寄せることが、さらにサービスの質を押し上げて行く原動力になると考える。だからこそ、自分から一歩、相手に歩み寄る姿勢を示すことが大切だと思うのである。

こうした足並みがそろっていないと、ケアプランは形だけのものとなり、サービスを利用する為の“手続き”

と化す。ケアプランを実体のあるものに変えるのは、目標・目的を共有化する作業としての「話し合い」であろう。「話し合い」自体はとりわけ珍しいものではないが、「何のために、何を目指してサービスを導入しているか」ということのすり合わせを行っていくことが重要であると私は考える。もちろん途中で修正が必要なることも出てくるだろう。その修正が必要だと言う事実が何によってもたらされているか、ということまでもチーム内で共有し、情報を集め、新しいサービスの“あり方”を作り上げていく。その「話し合い」の積み重ねの過程が大事だと思うのです。

提案その3 ご利用者様をもっと知ろう! (他者行動への感受性、志向すること)

なにより私達が一番意識しなくてはならないのは、ご利用者様に対する感受性である。経験は重要な物差しとなるが、ともすれば経験による固定観念はこうした感受性を低下させてしまうことがある。そして、判断や決定を求められる管理者やケアマネジャーの立場では、どうしてもこうした経験に頼る部分が出てくるのではないだろうか。提案1でも述べたように、意識して多角的にご利用者様に向き合うことで得られる情報は、「質」が違う。情報の精度が高まれば、それはサービスの質に直結し、利用者との信頼関係をより固くしていく。そして、さらに情報の質は高まっていく。こうした良循環を作り出すことは、まずは利用者様に対して意識をしっかり向けて行く、すなわち「志向」することから始まるのである。

私がケアマネジャーとして活動しはじめてからまだたったの半年間であるが、これほどまでに「人」と向き合い、「人生の在り方」について考える機会を持ったことはない。ケアマネジャーとしての仕事を通して、ご利用者様それぞれの「生活」スタイルの在り方について、少しずつ理解を深めることができ、学びの多い有意義な時間を過ごすことができている。今回私が得た「学び」というのは、今までのデイサービススタッフと、ケアマネジャーというご利用者様を見る立場の違いから生まれたものが多くあり、生活主体者としてのご利用者様を包括的に理解することの一端を知る事ができたことを、大変ありがたく思っている。実際に勤務し、ご利用者様のプラスの変化を目の当たりにしてきたサービスであるからこそ、自信を持って勧められる。この貴重な体験を自分の経験だけとして胸にしまっておくのではなく、ケア革命を推進する新たな道しるべとして、自社のサービス連携を深化、追及していければと思ってやまない。

心創り

感謝・感動が促した成長

リハビリ倶楽部築港 管理者

社会福祉主事 妹尾 祥平



はじめに

私は創心會に入社して2年と半年になる。スタッフの皆様へ支援していただきながら現在、役職も与えていただき、社会人として創心會人として成長していくことができている。まだまだ未熟者ではあるが、その中でも悩み、考え、答えを出してきたこの期間の出来事をお伝えすることで、皆様を取りくむ今後の業務への参考になれば幸いである。

入社前と入社後の違い

大学時代は成績が良いほうではなく、どちらかというと勉強は苦手であった。人付き合いも上手いほうではなく、これといった特徴がない人間であると自身で感じていた。入社後も専門的な知識が乏しかった当時の私にとって、ご利用者様の言動や行動、思考が理解できず、コミュニケーションがうまくいかないことで悩む事も多々あった。

しかし、入社してからの大きな私の変化としては、仕事の意味を考えるようになったことである。なぜこれをするのか、何の意味があるのか、もう少し工夫できる点はないかを日々考えて実践していくように心がけた。

創心會は研修も多く、自分自身を成長させるために最高の環境が整っている。私は多くの研修に参加させていただいたが、その大きな目的としては、理想とするセンターに導くために自身の成長を掲げた。創心會の基本的な考え方である長所進展を考えるうえで、入社時に作成した自身の分析に関するレポートを使用する。

入社当時の自己分析より・・・

自分の長所

①私の長所は人を尊敬することができることである。

私の人間関係の作り方は、まずその人のいいところを見つけ尊敬することからはじめる。それは年齢に関係なく先輩、後輩どちらに対しても言えることである。相手に敬意を持つとともに、見習えるところは見習い、常に自分が成長できるキッカケを探している。

②私は我慢強い性格である。今まで経験してきた部活、アルバイトは途中で辞めたことがない。また怒りに我を忘れるようなことはなく、その場では冷静な判断ができることも長所の一つである。我慢にも限界

があるが、一人の時間を有効に使いリフレッシュすることも覚えているので、うまく自分をコントロールできる。

③私は自分に厳しくできる人間である。今の自分には満足しておらず、成長したいと考えている。客観的に自分を見ることでその場での自分の役割を判断することができる。また、今出せる最高の自分を出すことで、自分に足りないものがより見えてくるので、それも忘れず心がけている。

④私は感じて行動するのではなく、考えて行動するため、考えがまとまるまではあまり行動を起こさないが、起こした行動については自分が計算できる範囲にとどまっている。後先を考えずに行動して、後で臨機応変に対処できる人間ではないため、しっかり計画を立ててその点をカバーしている。

⑤私は感謝の気持ちを持てる人間である。特に今まで自分を支えてくれた家族、先生、友達には本当に感謝している。親から受けた恩は返しきれものではないが、受けた恩のありがたみを理解することも親孝行のひとつであると考えているし、これから先も様々な人たちに支えてもらって生きていけるので、感謝の気持ちというのは常に持っていたいと思う。

入社してからの変化

尊敬するポイントを絞って、どこが尊敬できる長所なのかを見抜く視点が身につけてきていると感じている。これは長所進展を心がけてスタッフやご利用者様と関わっていたからであると考えている。長所は見抜くというよりも伝えて伸ばすことが大切であると考えていたため、面談時等には相手に伝えるようにしている。そこで実感したのが、スタッフのモチベーションが変化したということである。あるスタッフとの面談の中で「こういうことをしたら面白いんじゃないか」と業務提案があった。綿密にコミュニケーションをとっているつもりでも、一人ひとりの言葉をしっかり受け止め、行動に移せていなかった現状があった為、積極的に実現する方法を考えていただき実行に移していった。

そこで生まれた代表的なものが「築港オリンピック」である。築港オリンピックとは、ご利用者様に毎日の訓練の成果を発揮していただくというものである。

ロンドンオリンピックが開幕する時期であったため築港オリンピックという名称にして、競技への取り組みや表彰式を再現した。築港にはフロア内に2段高いステージがあり、そこを競技場として使うことでフロアのご利用者様全員から注目を集めることができるため、普段は味わえない緊張感を味わうことができる。車いすや階段昇降が不可能な方には会場を変更したが、原則は壇上の

ステージを会場として注目を浴びながら取り組んでいた。普段は気の強い方でも、壇上では弱気になって力を発揮できなかったり、口数が少なく黙々と訓練をされている方が、とても良い成績を残されたりと、意外な一面を知る良いきっかけとなった。

そのなかで予想外であったのが、普段は階段を登られないご利用者様が、ご自分で動いて壇上に上げられたことである。ご利用者様同志「頑張れ」という声上がり、競技に取り組む前から応援をしてくださっていた。きり祭りするときもそうであったように、創心會の出会いをきっかけにこのような関係性が生まれ、ご利用者様同士の絆を感じることができたことに、感動と感謝を覚えた一瞬であった。競技後の結果を見て喜ばれる方、悔しがられる方と様々で、中には「皆さんの協力があったことができました。本当にありがとう」と、涙ぐみながら挨拶をされた方もおられた。競技後には達成感と、次は優勝しようという未来へのモチベーションをもっていただけたと感じる。訓練の成果だけでなくその方の可能性を再認識できた最高の舞台となった。

● 管理者になって

私は人間関係創りが上手いほうではない。しかしながら入社して、目標とする先輩が管理者として輝いておられるのを見て、自分もそうなりたいと思うようになった。管理者になるということで、思い描いた自分の理想のセンター像は家族のような繋がりがあるということ。また社長が言われる、どこに出しても恥ずかしくない人財を育てるためには、どういった覚悟・心構えが必要なのかを考えていた。そのときに、自分はとても温かい家庭のような雰囲気包まれた社員であることを改めて再認識できた。

理想とする事業所・センター創りをするための意識改革のひとつとして、私は様々な研修に参加させていただいた。他者との関係性を深くするための技法や、多くの方の前でプレゼンテーションをする等、とても貴重な学びであった。また、各センターからスタッフが集まり、今まで関わった事のない方と交流を通して学んだ事は、今後の自分にとって大きな力となるだろう。

入社してからメンタル的に落ち込み、将来を不安に感じる時期もあった。そんな時に支えてくれた方が、私には数多く存在する。顔色がいつもと違うということで声をかけてくださる上長や現場スタッフ、新入社員研修をはじめ、各種研修を一緒に受けてきた多くの仲間何回も救われて来た。ほとんどがこの会社に入ってから関係である。そして忘れてはいけないご利用者様。私が休んだ日に来られていた方からは「この前休んだなあ」や「体調が悪いんか？」等様々な声をかけてくださる方

が多くおられる。また、スーツを着て歩いていると「どこか行くのか？気を付けてな」という気遣いの声までかけてくださり、その度に私は感謝の気持ちでいっぱいになる。最近では以前と比べご利用者様と関わらせていただく機会も減ってしまったが、ご利用者様との時間が私のひとつの楽しみである。

リハビリ倶楽部築港では毎年きり祭りを開催している。これは普段のご利用者様の取り組みや訓練の成果を大切な方（ご家族・ケアマネジャー・ご友人等）に見ていただくというものである。きり祭りの時期になると毎年ご利用者様から「今年もやろう」という声があがり、ご利用者様主体のとても素晴らしい取り組みとなっている。このきり祭りで私が感動した出来事が、ご利用者様が自身の体験を紹介されたコーナーである。発表では「病気で倒れたときは、先が真っ暗で何の希望も持てなかったが、そんなときにこのデイサービスに通うようになり、次第に表情が明るくなってきて、今では少しずつ出来ることが増えていく楽しみを実感しながら過ごしている」と、涙ながらに話してくださった。このような支援をさせていただけること、こうした感動の場に立ち会えることはこの仕事の素晴らしいところである。

● おわりに

私は現在リハビリ倶楽部築港の管理者として勤務させていただいている。まだまだご利用者様、ご家族様、スタッフ等迷惑をかけることも多々あるが、支えていただきながら今は管理者として日々成長することができている。この会社に入社して、ご利用者様、スタッフと築いた信頼関係は、私の人生にとってかけがえのない財産であると、日々感じている。そんな中で私は人生の財産を共に育てるという人財共育を行い、それぞれのスタッフ・ご利用者様の人生の財産を少しずつ増やしていただけるような働きかけができるよう日々精進していきたい。





コラム

ど根性ファーム

～半年を振り返って～

合同会社ど根性ファーム 川原 雅規

■ はじめに

私がど根性ファームに入社して半年が経ちました。この半年を振り返ってみると、学生から社会人というそれまでとは全く違う環境に入り戸惑うことも多いですが、その反面たくさんの経験を積むことが出来ています。また、入社して半年というまだまだ未熟な私に、このような原稿の執筆依頼をいただいたことは光栄なことだと思います。「農業と福祉」という道に進んだ理由、そして、ど根性ファームでの半年とこれからについて、お伝えできればと思います。

■ 「農業と福祉」への道

私が「農業と福祉」というものを意識するようになったのは、大学院時代の就職活動中でした。私の実家は、兼業ではありますが農業を営んでおり、昔から「農業」は身近に存在していました。そのこともあり、大学は農学部に進学し、専攻も栽培に関するものを選択、就職活動も種を作る会社や肥料会社をメインとして行っていました。当時を振り返ると、直接農業をしたいという考えは頭になかったのが正直なところです。就職活動が本格化してきた頃、担当の教授と農業について話す機会があり、その中で出てきたのが「農」と「福祉」の融合についてで、特別養護老人ホームで農業を取り入れた園芸療法を行っているというものでした。それまでは、農業と他分野の融合には関心を抱くこともありませんでしたが、その話を聞いて、農業分野は種や肥料、そしてただ栽培するだけではなく、福祉との融合という新しい可能性があることを知り、そのことについて考えるようになったのを覚えています。しかし、実際そういった事業を行っている会社はあまり無く、就職活動もそれまでと変わらず種会社や肥料会社を中心に行っていました。そんな中、創心會が新しく農業事業を立ち上げるに際し、農業分野での求人を行っていることを、就職サイトを通して知る機会がありました。農業を通した障害者の就労支援というのは、私が考えていた農業の新しい可能性であり、創心會に興味を湧きました。実際、見学をさせて

いただいた際に、農地は耕作放棄地を改良したものであるということを知り、本当にゼロからのスタートなんだなということを感じました。それと同時に、「新しいことにチャレンジするいい機会じゃないか」とも強く感じました。ただ、不安が無かったわけではありません。あまり知られていない分野に飛び込むというのは勇気があることで、私自身も「本当にこの分野に進むのか」という気持ちを抱きましたし、周囲からも「本当に大丈夫なのか」ということをよく言われていました。ただ、「農業の新しい可能性にチャレンジしたい!」「自分の選択は間違っていないかと信じる!」という気持ちが勝り、「農業と福祉」の道を進むため入社を決めました。

■ ど根性ファームのこれまでとこれから

入社してからの半年を振り返ると、とにかく駆け足だったと思います。農地の土作りから始まり、野菜の植え付け、6月からはネギやキュウリ、ナスの出荷も行うようになりました。ありがたいことに、グループ会社のNPO法人未来想造舎和一久をはじめ、合計3社との取引をさせていただいています。私は、各取引先の担当者の方との連絡調整役をさせていただいていますが、入社半年ながらこのような経験を積むことができ、本当にありがたいことだと感じています。このような経験をさせていただく上で重要に感じたことは、どのようにして取引先と良好な関係を築いていくかということです。現在は、こちらの出荷可能な量で取引をさせていただいていますが、やはり取引先から希望をお願いされることもあります。希望に沿える場合は問題ありませんが、やはり希望に沿えない状況というのもあります。そういった場合に何も考えず注文を受諾し、出荷時に注水量に達していなければ信用を失い、以降の取引がストップしてしまう可能性もあります。希望に沿えないようであれば、それを正直に伝える。そして、何日後であれば可能であるかということ伝えることで、取引先からの信用を失わないようにしています。対人関係の難しさこそ感じますが、これまでとは違う様々な人と交流を持つことができるこの機会を活かして、自身の成長に繋げたいと思います。

7月には、大雨によって畑が水没するという経験もしました。このときは、農業は自然との闘いであるということ改めて実感するとともに、与えられた環境にどのように適応していかなければならないかを考えるいい機会になったのではないかと思います。そして、自然との闘いである以上、予定通り作業が進むことはないということも知ることができました。ただ、困難なことはありますが、ネギ、キュウリ、ナス、モロヘイヤを収穫・出荷できたことは、栽培してきた自分からすると大変喜ばしいことです。ただ、栽培から出荷を経験することで、なぜ農家数が減少していくのかということも理解することができました。収穫量は天候に左右され、利益もなかなか上がらない。これらが農家数減少の要因であることは間違いないと思います。だからこそ、私たちど根性ファームは、農業でも利益を上げることができるということを証明しなければならないのではと思います。そのためにも、今後はただ栽培するのではなく、どのように栽培を行えば収穫量が増加し、利益確保を行えるのかを勉強・研究していく必要があると感じています。

ど根性ファームはこれから、笠岡市の約1ha、簡単に言えば100×100mの畑でネギを栽培していきます。売上予想としては、これまでとは比べ物にならないほどの規模です。私はその畑の管理を任されており、失敗することはできないというプレッシャーを感じていますが、そのプレッシャーを逆にチャンスと捉え、必ず成功させるという気持ちを抱いています。成功させるためにも、今まで以上に勉強しなければなりませんし、なによりも

「覚悟」を持って栽培に取り組んでいかなければならぬと感じています。また、私が入社を決めた理由である「農業と福祉」の融合、つまり障害者の就労支援も笠岡で行っていく予定となっています。私自身だけでなく、ど根性ファームの目標である就労支援を実現させるためにも、私の役割は非常に重要になってくると思います。そして、ど根性ファームの未来を私が担っていくという強い気持ちを持ち、今以上に真剣に本気で仕事に取り組んでいきたいと思っています。

笠岡だけでなく、今までの畑でも冬物野菜の植え付けが始まります。こちらの畑では、未来想造舎和久の配食部門に提供する野菜をメインに栽培していきます。創心會のご利用者様の食事の材料となるため、安心・安全・美味しいを目標に、ご利用者様に喜んでいただける野菜を栽培していきます。

創心會の歓働環境創りへの取り組み「あっぱれ制度」。その一つであるアクティビティを利用して、創心會グループの職員を対象とした農業体験も行っています。徐々に参加者の数も増えてきており、ど根性ファームの活動に関心を持っていただけているのではないかと感じています。今後もアクティビティを発信して、職員の方々に農業体験を通して、農業の楽しさを伝えていければと思います。

私自身、これから困難な状況に遭遇することが増えてくるとは思いますが、困難なときこそ自身が成長するチャンスであると考え、向上心、そして笑顔を忘れず日々を過ごしていきたいと思っています。



ど根性ファームで今年収穫したさといもが、どっさり

収穫したさといもを使って、ご利用者様による実践調理

現場レポート

旅リハに参加して 見えてきたご利用者様の 新たな一面

リハビリ倶楽部茶屋町 リハビリユニット
社会福祉主事 菅森 美希



デイサービスにいられているご利用者様の中には、外出する機会が少ない方は多くいらっしゃる。私は旅リハサポーターとして、ご利用者様と一緒に外出をすることができた。そこで、旅リハに参加するまで、旅リハの最中、旅リハ後で感じたご利用者様の新たな一面を紹介させて頂く。

私は、第二回・第三回の旅リハサポーターとして参加させて頂いた。

第二回の行き先は鳥取県。デイサービスのあるご利用者様が参加したいと言われる。また、ご本人様だけでなく奥様と参加したいとのことだった。詳しくお話を伺うと、第一回から創心會で旅行があるから行きたいと言われていたようだった。今回は行き先の中に鳥取花回廊があり、奥様が花好きということもあり、ご夫婦での参加が実現した。申し込み書類を提出し、参加決定。とは言ってもこのご利用者様には、旅リハ当日を迎えるにあたっていくつか課題があった。まずは、バスの乗り降りが出来るかどうか、バスの狭い通路を動けるかなどであった。そのため、ご利用者様に頑張ってもらわなければならないのだが、普段は意欲的にリハビリに取り組むことが少ない方であったため、私自身も無事に旅リハに参加できるのだろうかという不安があった。そこで実際のバスの段差の写真、段差の高さをご本人様と確認し、改めて一緒にトレーニングをすることを約束した。デイの段差を使っただけの段差昇降を行う。そしてバスの座席に座るための横歩きの練習。肋木を持ってもらい、後ろには椅子を置いてなるべくバス内の環境に近い状態で行った。そして、6月24日第二回旅リハを迎えた。サポーターの皆さんに介助をして頂いてのバスの乗り降りとなったが、奥様と一緒に出かけるという目標を実現することができた。旅

リハを迎えるまでの約一ヶ月間、旅リハに参加するという目標があったことで、リハビリメニューへの拒否もなく取り組んでおられた。目的・目標があれば、たとえ障害があっても頑張ることはできるということに改めて感じた。またバスの中では、まるで遠足のようにお菓子の交換をしている方もおられて新鮮な光景でもあった。行き先が鳥取県ということもあり、一つひとつの観光地での滞在時間が短かったのだが、限られた時間でおさかなセンターでの買い物、花回廊でお気に入りの花を見るなど、それぞれ皆さん楽しんでおられた。私自身も、この方がこんなペースで歩けるなんて！という驚きなど、感動することばかりであった。

そして第三回旅リハの行先は愛媛県道後温泉。数か月間、入院のため休止中であつたご利用者様も再開当初からこの旅リハを楽しみにされていた。ご本人様から、バスの段差や中の様子を教えてほしいという言葉が聞くことができ、とても嬉しく感じた。また、ご当地グルメをインターネットで調べ、地ビールやおつまみなどをチェックし、より旅の楽しみをご自分で増やしておられた。そして、9月23日第三回旅リハ当日。今回は、旅のしおりもあり、ご利用者様の楽しみもより高まったようだった。新たなご利用者様同士の関わりもあった。話をしたこともないご利用者様がお互い大好きなお酒を通しての関わり、「旅の安全を祈って！」と嬉しそうに乾杯をしておられる姿だった。次回の旅リハでも乾杯を二人でしないといけなくなるほどであった。また、今回は松山道後を散策ということで歩行距離がとても長かったのだが、車いすで移動しておられる方もいる中、杖歩行で移動されている方も多くおられ、これだけ歩ける力を持っていたんだと私も気づくことができた。何より、ご利用者様の素敵な笑顔がたくさん見ることができた。

旅リハを終えてから、ご利用者様が昨日の旅リハで疲れたから今日のデイを休むという方がおられなかったことも、とても私にとって嬉しいことでもあった。また、旅リハに参加した方が、「次も一緒にこう」と笑顔で誘って下さった。改めて、ご利用者様と旅リハに参加して良かったと思う瞬間でもあった。次回の第四回旅リハは創

心会大祭りと望年会。ご利用者様の笑顔や新たな可能性の発見が楽しみである。



原点回帰 リハビリ倶楽部の目的

リハビリ倶楽部吉備

健康運動実践指導者 仲本 幸平



創心會のリハビリ倶楽部は在宅での生活を意識した機能訓練を行っている。その在宅での生活へ向けた吉備センターの取り組みについてお伝えしたいと思う。

家でのトイレへの移動や食卓への移動など、在宅での生活を豊かにするためには、歩行能力は必要不可欠である。しかし、歩行能力といっても転倒してしまえば歩行ができなくなる。そこで、吉備センターでは「転倒予防」をメニュー化し取り入れた。マシンでのトレーニングや歩行訓練、段差昇降などの機能訓練を行っているが、実際には何のために行っているのかが分からないまま、リハビリに取り組みされているご利用者様もいるということが現状である。何のために行っているのかを意識して取り組めるよう、ご利用者様への意識付けとしても転倒予防という言葉掲げた。

実際に行っているメニューはバランス機能・下肢筋力の維持向上のための体操、小集団でのビジョントレーニング、様々な環境下での環境負荷歩行の3つである。

まず、体操としてはスロートレーニングというものを行っている。スロートレーニングは、太極拳の動きを取り入れた体操である。ゆっくり体を動かすことによって、大きく手足を動かす事ができ、また筋肉に負荷のかかる時間が長くなり、より筋力の向上や柔軟性の向上に繋がる。また、片足立ちなどの不安定な姿勢になることもあるため、バランス機能の向上にも繋がる。

次はビジョントレーニングについてお伝えする。吉備センターでは、個別でビジョントレーニングを行うということが難しく、午後の集団メニューとして行っていた。しかし、実際にしっかり行えている方がどのくらい

いるか、効果がどのくらいあるのかが確認できていなかった。今回、転倒予防メニューのなかで視覚機能の向上をすすめていくにあたって、ちゃんとした効果を期待できる形であるということで、集団の中だけでは行えない高度なメニューや難易度の高いメニューを取り入れようと考え、小集団でのビジョントレーニングを実施することにした。少人数で実施することで、ご利用者様の動きにスタッフも目が届きやすく、一人一人に説明を細かく行うことが出来る。転倒のメカニズムやビジョントレーニングの目的を理解していただけるよう、毎回ご利用者様としっかり目を合わせて説明を行っている。また、大人数には向かないナンバータッチ等のメニューが行える。

最後は環境負荷歩行についてお伝えする。この環境負荷歩行は、リハビリ倶楽部にある横木やバランスマットのような環境負荷だけではなく、実際の家でありそうな環境設定で行っている。ご利用者様もスタッフも、在宅を意識して行うことができ、さらに家で転倒しそうな場所を確認できる。床にコードが伸びている、チラシや新聞が乱雑にちらばっている、畳や布団がある。こういった日常的にある環境を意識して取り組んでいただいている。

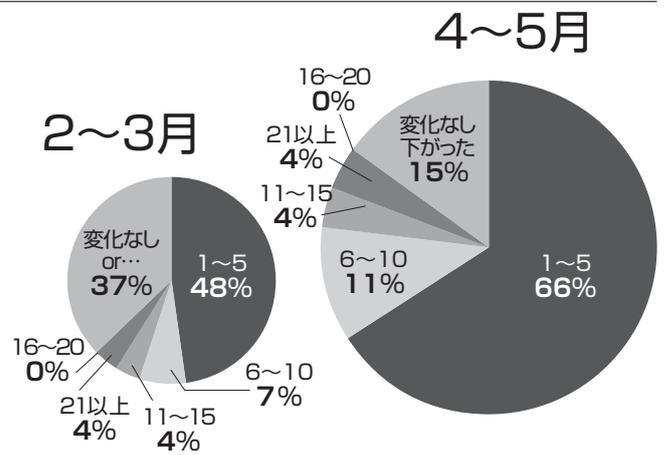
これらの取り組みにはスタッフ自身の理解が大切である。スロートレーニングは転倒予防メニューとして作成したメニューなので、スタッフがきちんとした方法を知らなければご利用者様は戸惑ってしまう。ビジョントレーニングもしっかり理解していない人の説明では聞いている側は、なおさら理解できない。このようなことが考えられるため、それぞれのメニューに対してのアプローチブックを作成し、スタッフ間でやり方を共有し実施した。

2月から9月までの約半年間実施した結果、参加時のご利用者様の様子にも変化が見られた。特にスロートレーニングでは、導入当初は「立つのは不安」という声が聞かれ、ほとんどの方が座位で行っていたが、現在では立位で体操をすることに対する不安感が軽減され、多くの方に立位で行っていただけている。これは転倒予防

メニューを継続して行ったことによって、立位動作に対してのご利用者様自身の自信や、バランス機能が向上したという実感からなのではないだろうか。また転倒予防ということでバランス能力を測る指標として、今回はリハビリ倶楽部で毎月行っている身体機能測定の片足立ちの数値を使用し、メニューの効果を検証した。対象者は提供時間が7～9時間の方で、転倒予防メニューに参加されている方とした。右の図は片足立ちの数値の上がり幅を示したグラフである。

すると、グラフで示したように、2月から5月までの片足立ちの数値が85%のご利用者様に上昇が見られ、バランスが向上していると考えられる。

私が入社し、吉備センターへ配属になった時にはもうこれらのメニューは出来あがっていた。そんな私にも転倒予防メニューが提供できたのは、先にお伝えしたようにスタッフへのアプローチブックがあったからである。このメニューは転倒予防のために行っている。転倒を予防するためには何が必要か、そもそもリハビリ倶楽部と

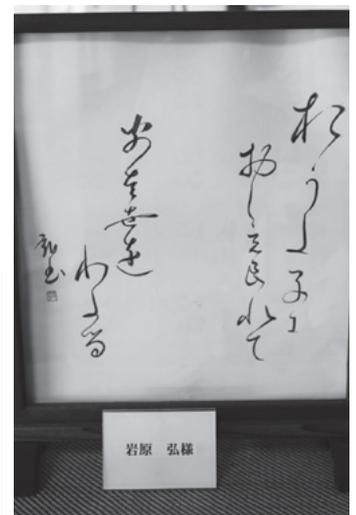
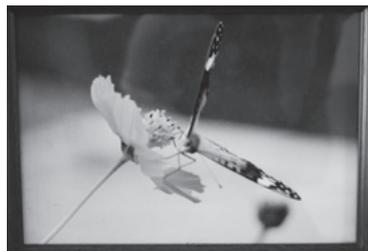
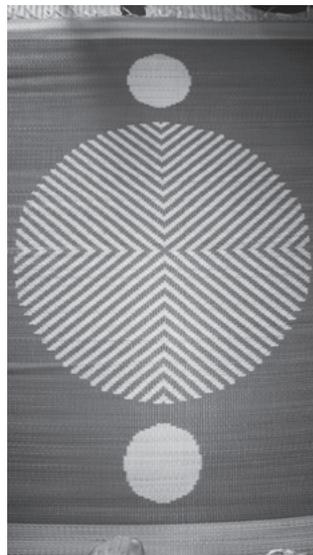


は何を目的としているのか。それは在宅である。そして在宅を意識するとは何なのか、社長がどのような想いを持ってリハビリ倶楽部を創設したのか。しっかりと認識し、メニューの方法だけでなく目的や意図も理解し、結果が出ている転倒予防メニューをこれからも継続して行い、さらにより良いものに進化させていくつもりだ。

これを読んで吉備センターの取り組みに興味を持って下さった方は、是非吉備センターへ！！

ご利用者様の作品アルバム

album



認知症ケア プロジェクト

周辺症状の対応と認知症部会の 活動状況について

認知症部会リーダー 創心会訪問看護ステーション
本物ケア推進部 作業療法士 吉中 京子

周辺症状に対するの対応の3回目は「拒否について」です。認知症の方との関わりの中で、食事・入浴・介助などの声掛けや誘導に対して拒否をされた経験はありませんか？ その時にどのように対応していいのか？と感じ、少し苦手意識を持ってしまうことがあると思います。今回は、その時の対応についてほんの一例ではありますが紹介します。

- ①拒否があってもスタッフ側が過剰に反応しない
- ②無理強いをしない
- ③スタッフ側や環境の問題を見直す
- ④「この人なら任せていい。」という安心感が得られるよう、1日を通しての接し方を配慮する
- ⑤スタッフ側が嫌悪感や恐怖感を持っていないか見直す
- ⑥無理に関わろうとしない・距離を取る・相性のいいスタッフとのバトンタッチ
- ⑦攻撃のエネルギーを他に向ける
- ⑧安心や自信の機会づくり

みなさんどうでしょうか？ 以上の事を心に留めながら、認知症の方の気持ちを考えることが大切であると実感しました。

(認知症部会の活動状況)

現在、月2回（第1・3木曜日 18:30～20:00）にブロック、事業所問わず20名程度のスタッフが集まり、症例検討・勉強会・サービス内容の検討などを行っています。症例検討では、各事業所が持ち回りで担当しご利用者様・ご家族への関わりの見直しや再発見ができています。各々の気づきを出し合う事で、お互いの違いを吸収することができ、気づきの幅が広がりつつあります。

勉強会では、外部勉強会の発信や和太鼓療法などを行っています。和太鼓療法の効果を、まずは自分たちが

確認するためにアセスメントを行い、総務の宇川さんの協力のもと本社グループホームにて和太鼓療法を開始しています。表情がいきいきとされ、真剣に取り組まれている方、他のご利用者様が和太鼓を叩く姿を目で懸命に追われている方と、和太鼓の音・振動を通していろんな反応を見ることが出来ました。サービス内容では、認知症の方になぜ五感刺激が効果的なのかというキーワードをもとに、五感（触覚・聴覚・味覚・視覚・嗅覚）についての説明の仕方を考えています。

部会を通して知識が深くなる事ももちろんですが、ブロック・事業所問わずスタッフの顔が見える関係が出来たと感じています。

「〇〇の事だったら〇〇さんが良く知っているから聞いてみたら？」と提案すると「私、〇〇さんのこと知らなくて」と、聞きたくても相手を知らない為に躊躇する言われることがありました。立ち上げ当初の認知症部会もそうでした。回数を重ねていくうちにお互いの悩み・取り組み等を相談しあえる場となっております。

興味のある方は、ぜひ参加をして頂けたらと思います。

引用・参考文献

永田 久美子：ケアスタッフのためのアルツハイマー病のケアの要点
認知症部会など各種勉強会での使用した資料



感動体験「心のバトン」

「縁」 私と創心會

創心會ヘルパーステーション岡山
サービス提供責任者

介護福祉士 武田 淑佳

新入社員？ と私のことをそう思っている方は多いと思います。私は老人福祉施設で働いていましたが、知識も能力も資格も足りず、1年足らずでリーダーとなり、「寄り添う介護」がしたかったはずなのにと感じる事が苦しくなり、専門学校へ入学し直し、人生3度目の新入社員となりました。現在は、益野センター内のヘルパーステーション岡山に勤務させていただいています。サービス提供責任者として入社させていただいたことに、何よりも卒業校の先生方が喜んで下さいました。心から感謝しています。



当時、本当にしんどかった施設での仕事は、おそらく3Kどころではなかったと感じます。そんな私が、なぜ福祉の仕事から離れられないのか、きっかけになっている出来事の1つを紹介したいと思います。「帰りたい」の気持ちが行ったり来たりする95歳の女性は、農繁期の2か月だけというショートステイの方でした。その方が夜更けに亡くなりました。その方の家族から、「看取れなかった」「つれて帰ってあげれば良かった」など、たくさんのお悔みの言葉が続きました。その気持ちは、時間がたった今でも感じていると話されます。ご利用者様だけでなく、ご家族を含めた、たった1つの「〇〇がしたい」の気持ちに添うことが出来ない現状や環境に、不甲斐なさを感じました。この体験は、「ご利用者様が満足する人生・家族が後悔しない介護の支援がしたい」と感じ、私を在宅支援の道へと導くことになりました。

私と創心會とは、縁があったとしか思えません。実は、創心會の事は在宅支援の専門とだけしか知らずに、勧められて説明会に足を運びました。そこで、「高齢者は、足が上がるだけではダメで、つまずきそうな所が見えれば気を付けることができる」と話されました。私の中に

は無かった思考、人事の方のキラキラした対応、熱い思いを持ちながらも遊び心を感じた面接に感動し、本当の自立支援を目指しているのではないかと感じ入社に至りました。若い同期生と一緒に研修を受けさせていただき、社長の熱い思いやスタッフの温かい対応に、今では何も知らずに入社したことを恥ずかしくも感じています。

実は、入社して間もなく創心會の取り組みを、私の家庭にも採り入れてみました。それは、ありがとうカードにちなんで、「ありがとうポイント」というものです。子供たちは、家族の為に進んで良いことをするとポイントが貰え、50ポイントでマクドナルドご招待券と交換です。これを行うことで、掃除など進んでお手伝いをする事が身についてきました。入社して、こんなに良いことまで付いてくるなんて嬉しい限りです。

ある日の新聞の特集に、「将来は施設入所したいか」の問いに、「約60%が希望する」書いてあるのを見ました。理由は、「家族に負担をかけたくない」が約90%でした。介護者や要介護者が負担に感じなければ、「自宅に居たい」ということになります。在宅生活を支えるという意味では、ヘルパーはなくてはならない部門であり、誤解を恐れずに言うならば、底辺であり頂点であると思っています。在宅での生活を少しでも長くスムーズにさせていただく為に、時には愚痴や不安を聞き、食事や入浴というほんの少し先の未来の「安心を提供すること」がサービスとなります。1対1でもあり、状況の判断を自分でしないといけない立場でもあり、常に全体に気を配らなくてはなりません。縁あってお会いしたご利用者様や、ご家族との関係性を構築出来るよう、本物ケアをいかに取り込めるかを考え、心に添うことに力を入れています。

遅ればせながらの新入社員ですが、周りの人たちや地域に頼る私を、家族はもちろん友人や社内の人たちが支えてくれています。ご利用者様の期待を裏切らないようサービスにあたることで、創心會のヘルパーステーションの職員は素敵だと知ってもらえると、地域への恩返しに繋がって行くのではないかと考えています。

次のバトンは、どうしても皆さんに紹介したい同期の綱嶋さんをお願いしたいと思います。

「感謝」

4年間を振り返って

参謀本部 人事部

諏訪 真樹

私が創心會に入社して、ちょうど4年が経ちました。入社当時の従業員数は、300名を超えたところだったと記憶しています。現在は、500名を超える人が創心會で働いており、一年で50名の人が増えている状況です。素晴らしい経験を積んでこられる方、技術を磨かれている方、新しいことへ挑戦しようとしている方、たくさんの方が、色々な想いを抱いて創心會へ応募して下さいます。



採用活動は、人事だけで行っているのではありません。面接に参加していただいているセンター長や管理者の皆さん、その方達が不在の間、事業所を支えてくださる現場の皆さんがいて初めて、新しい人財を採用させていただくことができるのです。求人活動も同様に、学校への説明会に同席していただいている方、その間の業務のカバーをしてくださる方たちに支えられ求人活動ができています。しかし、実際には私たちが行う求人・採用活動だけではいい採用はできません。皆さんの日々の業務活動での接遇力で、ご利用様やご家族、ケアマネジャーの方々に好印象を持っていただけている結果、創心會で働いてみたいと、安心して応募して下さるのだと思います。皆さんの日々の振る舞いの中から、社会的信頼を得られているからこそ求人・採用活動ができてい事を忘れてはいけません。また、入社後もスタッフの皆さんには、新しい仲間が創心會に早く馴染めるよう日々努力をしてくださることで、入社し不安に感じている方々も、安心して働くことができているのではないかと思います。私も入社した当初を思い出してみると、常に周りの人たちに支えられ、指導していただき、ここまで働いてくることができたのだと実感し、感謝しております。

創心會では、障がいを持たれている方もたくさん働かれています。調理補助や環境整備などを主な役割としています。具体的には、食事の盛り付け、配膳、食器の洗浄、手の行き届きにくい場所の清掃、お茶の準備等を毎日一生懸命されています。私も、センターに寄ることがあれば声をかけさせていただいています。すると、いつも元気に話をしてくださり、こちらもちょうど嬉しくなり元気になってきます。これも、センターで働かれている皆さんにより、継続して働ける環境を用意していただいている

からだだと思います。同じ従業員として役割を果たすため色々な声掛けや、配慮をしてくださることで、雇用を継続することができているのだと思います。

私はこの4年間、自身の自己啓発のため、色々な研修に挑戦してきました。管理者、リーダーを目指すS-1、S-2、S-3研修では、毎回40名近くの参加者がおり、入社したばかりの方からセンター長の方まで、様々な立場の方たちが合格を目指し、切磋琢磨してまいりました。特に私は、現場の皆さんに助けていただいたと思っています。一人では、合格することはできなかったと心から感謝しております。この研修では得た事は、知識だけではなく、共に働く人たちとの絆というべき繋がりが、より強くなったことだと思います。共に参加した仲間に感謝したいと思います。

また今年も研修が始まっています。知識だけを詰め込むだけでなく、ふだん話をしない方たちと積極的にコミュニケーションをとっていただき、仲間を増やしていただきたいと思っています。そういった繋がりが、現在の創心會を支えているのだと思います。これからも、皆さんに支えられていることを忘れず感謝してがんばっていききたいと思います。

私からのバトンは、参謀本部で共に人事担当をしている宮田明尚さんに渡したいと思います。





創心會大祭り芸能部門 もっとできるを“カタチ”にしよう

大祭り実行委員 副委員長 佐藤 健志

この記事が社員の皆さんのお手元にわたる頃には、すでに「祭りの後」でしょう。私が筆をとっているのは、その大祭りの1週間前。まさに今が追い込みの時期です。大変な時ではあるのですが、大祭り直前のタイミングである今だからこそ、再度私たちのコンセプトを明確にしておこうと考えました。

大祭り実行委員会副委員長として、「芸能部門」の担当者として、大祭りのメインテーマでもある「もっとできるをもっと知ろう」について考えてみたいと思います。

まず私は、自他ともに認める「お祭り男」。こうしたイベントを“やる”となったら、とにかく盛り上げないと気が済まない性分でもあります。そんな気性も手伝ってか、祭りの核とも言えるイベント担当を、「芸能部門」として任されることになりました。

早い段階で、メインテーマが今期の合言葉でもある「もっとできるをもっと知ろう」に決まっていたことから、あとはそれをどのように“カタチ”にするかということが、芸能部門に与えられた使命。それこそ、“腕の見せどころ”な訳です。

色々思いを巡らせて、まず「できるカタチ」として考え付いたのは創心會の利用者でもあり、講師としても活躍されている岡村誠次郎さん。まさに岡村さんは「できる」を体現する存在でもある。そこからアイデアを発展させて、利用者中心のセミナーを利用者自らが講師となっていく「仕掛け」ができないものだろうか、と考えるに至りました。

ここで連携を考えたのが、ハートスイッチです。岡村さんが講師登録されて活躍されていることもありますが、他にもご利用者様に対しての取り組みとしてiPad教室なども開催しています。その取り組みを紹介してもらえば、利用者の“できる”にもっとアプローチできるのではないかと考えたのです。そしてこの読みは予想以上の大当たりでした。iPad教室のご利用者様のなかには、講師顔負けの“iPad達人”がいらっしゃったのです。

それが、今回大祭りで講師デビューを果たされた藤原健二様でした。

藤原様のご家族は今回の講演依頼を大変喜んで下さり、「親族を挙げてバックアップする」という協力体制を敷いてくださいました。

ご利用者様の「できる」が皆を巻き込んでいる様子は、最初に私が想像していた以上に大きなうねりでした。

この体験が、私の“祭り魂”に火を着けました。

ご利用者様によるセミナーは確かに大変素晴らしい。だけれども、そこまでの「できるカタチ」は誰にでも簡単にできることじゃない。その大きな壁を越えられるような特別な仕掛けが何か無いものだろうか…。

そんな風に考えていた私の目に飛び込んできたのが、NHK のど自慢大会で歌う93才の高齢者の姿でした。好きな歌をのびのびと唄って、会場の拍手を一人占めしている。結果は鐘一つでしたが、その伸びやかな表情は、まさに私の思う「できるカタチ」を体現していました。

「これだ!!」と感じました。

歌は、その人の生きて来た時代の世相を反映する。そして、その人が好きな歌というのは、その人の人生を体現する。

「歌は世につれ、世は歌につれ」というではありませんか。

これは単なるカラオケではない。歌のうまさの優劣を競うのではない。歌にかけるその人のエピソードに注目すれば、そこにはおそらく様々な利用者様の人生模様が浮かび上がってくるのではないだろうか。

そして想像しました。

例えば脳卒中の後遺症で言葉が出にくくなった人が、一生懸命言語訓練をして人前で歌うと言う緊張感を乗り越えて、堂々と好きな歌を唄う姿を。唄が好きな人にとって、これほどの晴れ舞台があるだろうか。そう考えただけでもゾクゾクします。

そうした“想い”をカタチにする為に、私達は「のど自慢大会」を行うことに決めたのです。そして、20名あまりのご利用者様がこれに手をあげて下さいました。そのエピソードを読ませて頂くだけでも、やはり自分たちのやるべき方向は間違っていないと実感できるものでした。

果たして、この試みがどのような結果をもたらすものであるか。答えは大祭りの、本番のステージで出ていることでしょう。

もっとできるを、もっと知ろう。
そしてもっとできるを、具体的な“カタチ”にしよう。

FESTIVAL of the PEOPLE by the PEOPLE for the PEOPLE

創心會 大祭り

もっとできるをもっと知ろう

いい日いい日は「介護の日」
2012/11/11
開催時間 10:00 - 16:00

創心會大祭りは「できること」を知って頂き、自身の可能性を発見して頂くための祭りです。

- 元氣&きらり祭 (ご利用者の取り組み発表)
 - リハビリで出来たアート作品・クラフト展示
- ご利用者様による講演
 - 演題1 「自分で決めないあきらめない」
 - 演題2 「(仮称) 脳トレiPad教室で学んだこと」
 - 一人と繋がる共有する楽しさ
- Shop & Café
 - 日用品/バザー・Café OYATSU 自慢のスイーツのみどり玄米ケーキ他
 - カレー・焼きそば・たこ焼き・ホルモントンドン他
- イベント
 - 和太鼓/フラダンス/のど自慢大会
- 旗りハ
 - 旗りハ5年会 (せとうち児童ホテル) 創心會大祭り参加

旗りハで参加できます!

サウスビレッジ

【後援 (順不同)】
岡山県介護福祉士会・岡山県作業療法士会・岡山県理学療法士会 他

株式会社創心會 大祭り実行委員会



11/11 創心會大祭り

創心會では、「もっとできるをもっと知ろう」をテーマに、ご利用者様が自身の可能性に気づき、機能訓練の効果を高めて頂けるような仕組み創りに取り組んでおります。

今回の「大祭り」は、上記活動の一環として、介護の日である11月11日に岡山ファーマーズマーケットサウスビレッジ内に、創心會のご利用者様の自己表現、自己実現を支援する機会として、又関連事業との連携によって機能回復、自立支援の先を見据えた福祉の姿を発信する場をめざし開催させて頂きます。内容は、ご利用者様の講演や作品の展示、各運営事業所による屋台の出店、協賛いただいております団体によるイベント等になります。

皆様のご来場を心よりお待ちしております。

【イベント開催場所】岡山南区片岡 2468
ファーマーズマーケットサウスビレッジ内

イベント
タイムスケジュール

(予定)

10:00 開会

10:10 和太鼓/フラ

11:00 ↓

12:00 ↓

13:00 ご利用者様講演

14:00 のど自慢大会

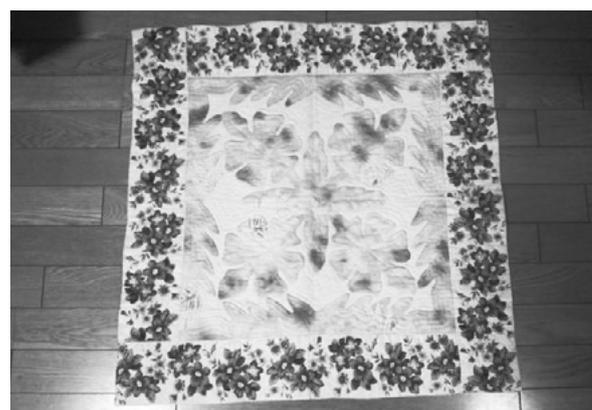
15:00 ↓

15:30 バンド演奏など

16:00 閉会

※発注調整中のイベントもございます。イベントプログラムは変更になる可能性があります。

【サウスビレッジ内会場図】



創心會大祭りポスター

ご利用者様の出品作品



HEART SWITCH  ■ハートスイッチよりお知らせ

介護福祉士受験対策講座 開講

日 時：11月6日（火）～スタート
18：30～20：30 / 夜間クラス 全8回
受講料：28,000円（税込、テキスト代込）
場 所：創心會本部センター2F 研修室

ハートスイッチ特別講座
～いまさら聞けない介護技術・知識編～

日 時：11月15日（木）18：30～20：00
90分講座
受講料：500円
場 所：創心會本部センター2F 研修室
テーマ：ポイントを知って快適介助！！
「排泄介助介護術」

*いずれもお申込みはハートスイッチまで
URL:<http://www.herat-switch.com>

■ど根性ニュース

11月3日にイモ掘り体験を行いました！
今回は、スタッフだけでなくお子さんも参加してくださって、いつもとは一味違うアクティビティ活動だったように思います。
今後、このような体験を増やしていけたらと思える1日でした！
参加してくださった皆様ありがとうございます！



編集後記

秋は本当に夕焼けがきれいです。事務所の窓から夕焼けを見ながら、日々スタッフの皆さんと様々な「もっとできる」に向けて取り組んできました。季節が冬に向っていることを感じながら、いよいよ創心會大祭りが開

催されます。今年は、開催規模も内容も盛りだくさん。ご利用者様の「もっとできる」が随所に溢れています。17期も折り返し地点です。皆さんは自身の「もっとできる」が見つかりましたか？今年も残りわずかとなりました。

それぞれの場所で、同じ目標に向かって想いを形に、そして結果へと繋げていきましょう。

編集部 赤澤

書名 株式会社創心會[®]機関誌『2012年秋号』Vol.15
The Journal of True Care
発行者 株式会社 創心會[®]
〒710-1101 岡山県倉敷市茶屋町2102番地14
創刊日 2009年5月1日
発行日 2012年11月10日
定価 500円(税込)

※無断転載は固くお断りいたします。

The Journal of
True Care

2012年秋号

第15号

平成24年11月10日発行(年4回発行)

編集・発行 / 株式会社 創心會 〒710-1101

岡山県倉敷市茶屋町2102番地14

TEL:086-420-1500

E-mail: info@soushinkai.com

創心から



総合ケアサービス
株式会社 創心會®